

< 2018年12月 >

古賀 順子

「ストラスブールのクリスマス・マーケット」

2年半振りに思い出の地ストラスブールに来た。木組みの古いアルザス家屋が川の両岸に並ぶ「プチット・フランス」。その西端にかかる「クヴェール橋」の袂にある大きなポプラの木の下で、旬の白アスパラガスを食べながら馬場さんと過ごした時間が蘇る。5月にしては少し冷たい風に吹かれて、余命宣告を受けた馬場さんが家族を残して先に逝くことの思いを静かに話してくださった。死ぬ準備ができる自分は恵まれているのかもしれない、との口調が穏やかでもあり、残酷でもあり、多くを答えることはできずにじっと聞いていた。それから1年が過ぎた2017年5月馬場さんは眠るように静かに他界された。

そのストラスブールで12月11日(火)20時テロ事件が起きた。当日の朝、犯人不在の家宅捜査が行われ、手榴弾を押収、それを引き金に犯人シャリフ・シャカット(29歳)の発砲が5名の死者と12名の重軽傷者を出した。1週間後にストラスブールのクリスマス・マーケットに行く予定をキャンセルすべきかと迷った。警官との銃撃戦で腕に傷を負ったまま48時間潜伏していた犯人が射殺され、13日からクリスマス・マーケットが再開された。半年前から準備してきた旅行でもあり、いつ何処で何が起こるかも知れないのだからと予定通りに出発した。

18日(火)ストラスブールに到着した。中洲になっている旧市街に入るすべての橋に検問が設けてあった。2015年の連続テロ事件以来、フランス国内300ヶ所に及ぶクリスマス・マーケットの警備は続いてきたが、それを忘れかけていた矢先の惨事だった。ボディチェック、持ち物チェックを受けて、大聖堂に近い「クレベール広場」に面したホテルまで歩いた。SNCFの駅から歩いて15分の距離だが、銃を持った軍隊、制服姿でパトロールする警官、地方自治体所属の警官、

CRS(フランス共和国保安機動隊)に何度もすれ違った。ヨーロッパで一番古く、450年続いてきたストラスブールのクリスマス・マーケットだが、テロの影響は大きく観光客は目立って少なかった。「クレベール広場」には、高さ30m、樹齢90年のモミの木のクリスマスツリーが綺麗なイルミネーションに光っていた。しかし、そのツリーの前、広場の中心にある「クレベール像」の足元にテロの犠牲者の冥福を祈るロウソクと花束を囲む人の姿が目についた。「クレベール広場」からストラスブール大聖堂に向かう路上でも、テロに倒れた現場には犠牲者を悼むロウソクと花束が痛ましかった。家族が集まり、一年で最も大切なクリスマスを間近にして不幸に遭われた方の家族を思うと言葉を失う。重い空気は拭いきれないが、クリスマス・マーケットでホットワインやココア、焼き栗、クレープを出しているお店の人から、テロがあったにも拘らず来てくれたのはとても嬉しいと言われた。翌19日、コルマールとリックビールのクリスマス・マーケットに案内してくださったミニバスの運転手兼ガイドさんからも同じことを言われた。

犯人は移民2世ストラスブール生まれのフランス人である。10代から窃盗などの罪で、フランス、ドイツ、ベルギーで逮捕されている。中世からヨーロッパの十字路として繁栄してきたストラスブールの地理上の利点は、テロリストの温床ともなっている。ドイツ国境まで3km、発砲直後に犯人を乗せたタクシー運転手の通報で、事件発生後15分でストラスブールを包囲できたのが早い解決に繋がった。フランス社会に恨みを持つテロリスト、生活に苦しむ貧困層フランス人に対してどのような政策を取っていくか、マクロン大統領の政治生命に関わる問題である。11月17日(土)燃料税引上げ反対デモを発端に続いている毎土曜日の「ジレ・ジョーヌ(黄色いベスト)」デモも終わる気配はない。

3日後にクリスマスを抑えたパリに戻り、休暇で多くの人が移動これから2週間。事なく年末年始を迎えられることを願う。

「ストラスブールのクリスマス」

